

2018 年 6 月 17 日（日）「つまずきの種」

マタイ 18:6-11

6 しかし、わたしを信じるこの小さい者たちのひとりにでもつまずきを与えるような者は、大きい石臼を首にかけられて、湖の深みでおぼれ死んだほうがましです。7 つまずきを与えるこの世はわざわざいだ。つまずきが起こるのは避けられないが、つまずきをもたらす者はわざわざいだ。

8 もし、あなたの手か足の一つがあなたをつまづかせるなら、それを切って捨てなさい。片手片足でいのちに入るほうが、両手両足そろっていて永遠の火に投げ入れられるよりは、あなたにとってよいことです。9 また、もし、あなたの一方の目が、あなたをつまづかせるなら、それをえぐり出して捨てなさい。片目でいのちに入るほうが、両目そろっていて燃えるゲヘナに投げ入れられるよりは、あなたにとってよいことです。

10 あなたがたは、この小さい者たちを、ひとりでも見下げたりしないように気をつけなさい。まことに、あなたがたに告げます。彼らの天の御使いたちは、天におられるわたしの父の御顔をいつも見ているからです。11〔人の子は、失われている者を救うために来たのです。〕

【序論】

今日は与えられたテキストから「つまずき」の問題を考えてまいります。そういえば、学生の頃、車内で二人の先輩が「つまずきをもたらす方が悪いか、つまずく方が悪いか」という議論を熱く交わしていたのを思い出します。彼らの論点は、「世の中にはつまずきやすい人とそうでない人がいる。つまづかせるつもりで言ったのではないのに、つまづかれてしまうこともある。その場合、問題はどちらにあるか」ということだったと思います。

信仰生活を送る中で、私たちは自分自身が何かにつまづくことがあり、また誰かをつまづかせてしまうこともあります。そして、このことを何でもないことのように思っておりますと、豈^{あにはか}図らんや、とんでもない危機を自らの身に招いている可能性があるのです。9 節には「ゲヘナ」という言葉まで出てきて、つまずきと地獄の近い関係に慄きます。ただ、実際のところ、私たちはそこまで深刻な問題として「つまずき」を考えてこなかったのではないのでしょうか。

今日は改めて、自分の言行に目を留め、自分をも他人をもつまづかせないために留意すべきことを考えていきたいと思います。

【本論】

今日の箇所は少々特殊な構造になっています。6～7節では「小さい者たちをつまずかせる者の災い」について書かれており、この内容は10節に続いています。ところが、中間の8～9節には「自分自身をつまずかせる種」について書かれており、この二つの節が挿入された形となっている。そして、8～9節の内容は以前に学びました5:29-30の内容とほぼ同じであることにも気づかれたのではないのでしょうか。

本論1. 小さき者へのつまずき

しかし、わたしを信じるこの小さい者たちのひとりにでもつまずきを与えるような者は、大きい石臼を首にかけられて、湖の深みでおぼれ死んだほうがましです。つまずきを与えるこの世はわざわざいだ。つまずきが起こるのは避けられないが、つまずきをもたらす者はわざわざいだ。(18:6-7)

「小さい者」という表現はマタイ独特のもので(10:42、11:25、25:40, 45)、ニュアンスとしてはこの世において弱く取るに足りない弟子たちのことを言っているでしょう。言い換え可能の言葉としては、山上の説教「八福」に見られる「心の貧しい者」「柔和な者」「義のために迫害されている者」が該当すると思われます。つまり、自分の罪を嘆き悲しみ、主張できる権利を敢えて行使せず、主イエスのための苦しみを甘んじて受けている人々。キリスト者のことです。

では、キリスト者をつまずかせるとはどういうことであるか。「つまずきを与える」という言葉は原文では「σκανδαλίστην」で、「スキャンダル」(語源:「罨」)という英語の元になっている言葉です。最近、「罨」というものを見かけることはあまりありませんが、鳥獣を仕留めるために仕掛けられるものであることは誰でも知っているでしょう。私は子どもの頃、砂場で落とし穴を作り、そこにズボッと足を取られる人を見ては喜んでいました(性格悪いですね)。このような遊びならまだしも、人間世界で仕掛けられる罨は、人の人生を台無しにしてしまうほど性質の悪いものが多い。法の網をくぐり抜け、消費者から何千万円というお金を騙し取り、姿をくらます悪しき業者の話も耳にします。そして、信仰の世界に置き換えれば、ある兄弟(姉妹)の信仰に疑念を抱かせる言葉を投げかけ、イエス・キリストに対する不信の念を植え付け、異端に導き、冒瀆的な言葉を語らせるといったことをする人がいます。これは誇張ではなく、私は実際にそういうことがクリスチャン同士の関係でなされているのを見てきました。

一つ忘れることのできない出来事があります。同級生の中に一人の大変純粋な青年が

いました。彼は早天祈祷会も休むことはなく、勉強にも真面目に取り組み、彼の部屋からはよくギターを弾きながら大きな声で賛美をしているのが聞こえてきたのを覚えています。ところが、ある時から彼は全く変わってしまいました。ある人から「お前は洗脳されている」「信仰から自由になれ」「もっと人生を楽しめ」と言われ、(彼はあまりに純粹すぎた)自分の生き方そのものを疑い始め、不品行と暴言に染まっていきました。久々に再会した時のあまりの変わりように、私は目を疑ったものです。同一人物からの悪しき進言は何と私にも及び、「日曜日に礼拝を守るって誰が決めたんだ」「自由を得ろよ」「勇気を出して明日の奉仕を休んでみろよ」といった言葉が投げかけられたこともあります。私はその道に危険を感じ、進むことはありませんでしたが、あのようなことを吹聴して回っていた人間は呪われるべきでしょう。

主イエスは人を信仰から引き摺り下ろすような人間は、石臼を首にかけられて溺れ死んだ方がよいとまで言われます。石臼とは、文字通りには「^{ろば}驢馬の石臼」で、二枚の白石の間に穀物が入るようにして、それを驢馬にグルグル回らせて挽く大型の石臼がイメージされます。そんなものをくくり付けられて水中に落とされたら、誰も浮かび上がることはできません。古代ローマやギリシャには実際にそのような刑罰があったようで、主イエスは人をつまずかせることはそれほどの重罪であることを強調しておられるのです。

本論 2. 自分自身をつまずかせる種

しかし、「人をつまずかせる」という事柄は、何も先に挙げた例に留まるものではありません。マタイは読者自身の心に問いかけます。

もし、あなたの手か足の一つがあなたをつまずかせるなら、それを切って捨てなさい。片手片足でいのちに入るほうが、両手両足そろっていて永遠の火に投げ入れられるよりは、あなたにとってよいことです。また、もし、あなたの方の目が、あなたをつまずかせるなら、それをえぐり出して捨てなさい。片目でいのちに入るほうが、両目そろっていて燃えるゲヘナに投げ入れられるよりは、あなたにとってよいことです。(18:8-9)

これは5章で既に学んだ内容です。しかし、マタイが敢えてここにもう一度同じ教えを置いたことには意味があるでしょう。信仰者は自分の内に自らをつまずかせる種があることを知らなくてはなりません。

まず「手足」が自分をつまずかせるということが言われています。「手」とは、罪の実際的行為が行なわれる器官。盗みであれ、不品行であれ、手がなければそのようなことには至らないはずです。「足」とは、行つてはならないところへ人間を連れていく器

官。これは比喩的な意味でも言うことができる。進むべきではない道を選ぶ、悪しき者の誘いに着いて行くことなど。

後半では「目」が問題とされます。これは「手足」よりももっと根源的な「罪への入口」です。人はまず目で見て何らかの願望を抱きます。目で見たものによって、自分の内に隠れていた欲が刺激される。欲望の火に油が注がれる。私たちが日頃目にするもの、読むものの影響は計り知れません。そこにはもちろん「聞く」という要素も含まれてくるでしょう。

主イエスは、人が何かの刺激を受け、罪を犯すことを軽く見てはおられないのです。そこには信仰の危機がある。私たちは自覚的な罪を犯した時、祈ることができるか。神の御顔を避けるのではありませんか。罪は神と人の関係を引き裂くものです。これは私たちが日々経験していることであり、何か本来あるべきところから転落していくような感覚を覚えながら、それでも神の御前に立とう立とうとしている自分を知っているのではありませんか。私たちは自分の内に義がないことを知っています。あるのは罪ばかり。自分の内には罪に打ち勝つ力がないのです。

しかし、そのような私たちがなぜ神の御前に立ち得るか。それは、内におられるキリストの義によるのです。わが内に住まわれる聖霊によって、私たちは「聖徒」とされている。しかしながら、この聖霊の火は私たちの罪によって光を失う可能性があります。主イエスが恐れているのは、私たちが常習的な罪によっていつの間にか聖霊の火が消えてしまっていることにすら気づかないでいることなのです（I テサロニケ 5:19）。これは日々積み重ねられる小さな罪によって、無意識の内に起きてくることです。罪を甘く見てはいけません。私たちを罪に誘^{いざな}うものには近づくべきではないのです。主イエスが言われるように、手足を切り取るが如く、目を抉り出すかのように、決然とそれを拒絶しなくてはならない。捨てるべきものが何であるかを知っているのは私たち自身です。一見良いものに見える何かが、実は神との関係を阻んでいるということもある。それを内心知っている私たちには、時に切り捨てることさえ求められるのです。神はそれほどまでに私たちとの交わりを求めておられる。

罪を犯し続けた人の行き先について、「ゲヘナ」という恐ろしい言葉が使われています。当時、焼却炉として用いられていた「ゲ・ヒンノム」という谷から来た名前です。天国が本当にあるならば、地獄も存在するでしょう。なぜなら、天国には罪の入り込む余地がないからです。天国が完成する時、すべての罪・咎・不義は焼かれ、清められなくてはなりません。神の住まいが再びそのようなもので汚されてはならない。私たちが聖潔に生きるべき理由は、私たちが既に「聖徒」とされていて、自分を再び「焼かれるべき存在」としてはいけないからです。

本論 3. 小さき者の内におられるキリスト

あなたがたは、この小さい者たちを、ひとりでも見下げたりしないように気をつけなさい。

まことに、あなたがたに告げます。彼らの天の御使いたちは、天におられるわたしの父の御顔をいつも見ているからです。〔人の子は、失われている者を救うために来たのです。〕 (18:10-11)

話題は再び「小さい者」に戻ります。主イエスに属する「小さい者」(弟子)をつまづかせないようにという戒めは、弟子自身の内面的問題として8～9節で取り上げられましたが、同時に弟子同士の関係においても適用される。ここに「見下げる」(καταφρονέω)という動詞が出てきますが、ある信徒が別の信徒に対して何らかの優越感を持ったり、蔑んだりすることが想定されているでしょう。これは、つまづきが起きる典型的な状況です。賜物を誇ったり、学歴を誇ったり、持ち物を誇ったり、知識を誇ったりするところには、この世の価値観の流入があります。神の国の価値はそのようなもので計ることはできません。むしろ、子どものように神の国を受け入れ、自分が何者でもないことを知ることこそ、神の御前に評価される。ですから、信徒同士の間での優越感・劣等感ほど不適切なものはないでしょう。

主イエスはここで少々不思議なことを言っておられます。あたかも一人一人に守護天使が付いているかのような言及です。実際そうなのかも知れません。しかし、これは恐らく、天の軍勢が地上の教会に属する弱い私たちのために働き、祈りをささげているという意味なのでしょう。例外なく、誰もが罪に対して弱さを持っている。いつ誘惑に心を奪われ、罪を犯すか分からない私たちであります。そして、神の御顔の光を避けて隠れる私たちです。そんな私たちを赦し、励まし、再び神に顔を向けられるようにしてくださる主イエス。私たちが自分はそういう人間であると自覚するならば、もはや人を見下げることはないでしょう。

11節は括弧で括られていますが、これは恐らくルカ 19:10 から引っ張られてきたフレーズです。シナイ写本、バチカン写本などの有力な写本には欠けているため、後から写字生によって書き加えられたものと考えられます。しかし、この言葉の真理は誰も否定することはできません。主イエスにとって「失われていない」人は一人もいないのです。

義人はいない。ひとりもない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行う人はいない。ひとりもない。

(ローマ3:10-12)

【結論】

今日は「つまずきの種」について考えてまいりました。人間の内側には欲望が潜み、その欲望の火に油を注ぐものは外側からやってきます。自分の欲望を発火させるものに気をつけましょう。他人の欲望や弱さを刺激することも慎まなくてはなりません。何であれ、人を神から引き離す要素は、切り捨てられ、決り取られなくてはならない。私たちは弱さを持つ罪人ですが、それでも内側に聖霊の灯火が燃えているのです。欲望の火ではなく、聖霊の火を燃え立たせましょう。その燃料は、御言葉であり、祈りです。悪いものによってではなく、良いもので自分自身を、隣人を満たす者になりたいと願います。

【祈り】

聖なる神よ。私たちは「聖徒」と呼ばれるにはあまりにも穢れた者たちです。自分の心に潜む欲望を知っています。そして、如何に誘惑に弱い存在であるかも知っています。私たちが罪を犯すたびにあなたとの関係が悪くなっているのですしたら、今すぐにそのことに気づかせ、生き方そのものを改めさせてください。聖霊の火を燃え立たせ、罪に対して敏感になり、自分をも他人をもつまずかせることがないよう、どうかお守りください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

人の弱さを知り、尚もご自分に属する民を「聖徒」と呼び給う、父なる神の愛。

「失われた者」に命を与え、「小さき者」の魂を憐れみ給う、主イエス・キリストの恵み。

罪に敏感に気づかせ、己をも他人をもつまずかせる種を取り去り給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。